

# 知求会ニュース

2014年4月

第49号

## ◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

**人見千佐子**(*HITOMI Chisako*) (国際文化研究専攻・10期生)さんが、2013(平成25)年3月24日(月)に法政大学大学院 人文科学研究科 国際日本学インスティテュート で、以下のように学位を取得されました。なお、知求会ニュース第51号の「博士録」コーナーで博士論文の概要を掲載します。

人見千佐子「イーハトーヴ世界の創造 ―宮沢賢治の体感した空間―

博士(学術) : 第544号

## ◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

**芦 暁博**(国際学研究専攻・3期生)さんが、2013年9月30日(月)に戸川正人さん、方 小贇さん、サ ソチアさん、岡本義輝さん、崔 寶允さん、金 多希さん、金 裕美さん、蔡 佳樹さんに続いて第9号の博士号学位を授与されました。

**范 喜春**(国際学研究専攻・5期生)さん、**金 英花**(国際学研究専攻・4期生)さん、**趙 敏**(国際学研究専攻・4期生)さんが、2014年3月25日(月)に芦 暁博さんに続いて第10号・第11号・第12号の博士号学位を授与されました。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(社会学)(一橋大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 5名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)の計18名です。

## ◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

**胡哈斯其木格**(国際文化研究専攻・13期生)さん、**森谷亮太**(国際交流研究専攻・8期生)さん、**陳 佳敏**(国際文化研究専攻・14期生)さん、**石崎達也**(国際文化研究専攻・14期生)さんと**金光一**(国際交流研究専攻・9期生)さんが、宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻に進学されます。

## ◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2014(平成25)年3月24日(月曜日)午後1時10分から国際学部4階大会議室にて、2013年度学位記手渡し式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第14期生の**尹 曉慧**さん・**何 佳文**さん・**邱 玉明**さん・**包 金**さんの4名でした。国際文化研究専攻の第14期生**袁 芳**さん・**袁 満艶**さん・**韓 雪花**さん・**谷 泉**さん・**陳 佳敏**さん・**王 偉鋒**さん・**石崎 達也**さん・**劉 洋**さんの8名

でした。国際交流研究専攻の第6期生加藤 靖さん・第8期生森谷亮太さん、第9期生アギーレ ヘレーラ ガブリエラ マルシアさん・金光一さん・張 磊磊さん・辻 紀江さん・鄭春美さん・鄭 思宇さん・鄭 文さん・董 瑞瑞さん・余 蜜さん・李 莉さんの12名でした。計22名でした。

17年度より、学業優秀者に贈られる宇都宮大学奨学金(奨励賞)に、国際学研究科の1名として陳 佳敏(国際文化研究専攻)さんが受賞されました。

◎ 受賞おめでとうございます!

橋本 孝国際学部名誉教授が、ドイツのケルン大学にあるJaDe基金から2014(平成26)年2月8日に2014年日独学術文化賞を受賞されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/2014/03/001360.php>

◎ 教職員人事異動

友松 篤信名誉教授

国際社会交流研究講座の友松先生が、3月末日付で定年退職されました。宇都宮大学には1991年5月(国際学部には1994年10月)から12年11か月間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

高際 澄雄名誉教授

地球文化形成研究講座の高際先生が、3月末日付で定年退職されました。宇都宮大学には1980年10月から19年間半在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

久野 秀和さん

5年間在籍されていた専門職員の久野さんが4月1日付で農学部総務係に異動されました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。在職期間中は大変お疲れ様でした。後任には、教育学部附属学校事務室から小川由美子さんが着任されました。

◎着任教員紹介その19

大橋 敦先生

氏名(英文): 大橋 敦 (OHASHI Atsushi)

専門: 日本語文化史

前職: 大学非常勤講師

趣味: 写真 料理

自己紹介: 昨年(2013年)の10月に着任しました。1年半の任期のうち、もう約三分之一が過ぎてしまいましたが、のこりの1年間も宇都宮大学で私ができることを着実にやっていきたいと思っています。私はこれまで江戸時代の言語文化を対象に研究を進めてきましたが、とくに興味を持って取り組んでいるテーマは、当時の日本でさかんに行われていた古典中国語(漢文)の教育についてです。意外かもしれませんが、江戸の漢文教育は日本の言語

文化に大きな影響を与えていて、例えば、講読の授業や本を（音読ではなく）黙読する慣習は、もともと漢文教育の場で導入されていたものです。現代日本の言語教育にもつながるテーマですので、研究の成果をわかりやすい形で公開していきたいと考えています。大学院の授業では、来年度（2014年度）の前期に「現代日本語特論」を担当しますが、大学院生のみなさんと、日本語や日本語文化について議論できることを楽しみにしています。

（2014年3月21日原稿受理）

## ◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	1名	・社会人	2名	・外国人	2名	計	5名
国際文化研究専攻	一般	2名	・社会人	0名	・外国人	8名	計	10名
国際交流研究専攻	一般	1名	・社会人	1名	・外国人	5名		
			国際交流・国際貢献活動経験者	0名			計	7名
							合計	22名

## ○刊行案内

・HANDSプロジェクトから『中学教科単語帳』（日本語⇄フィリピン語、別冊つき）が刊行されました。

・田巻松雄著（HANDSプロジェクト協力）『地域のグローバル化にどのように向き合うか—外国人児童生徒教育問題を中心に』が、宇都宮大学国際学叢書として、下野新聞社より2014年3月に刊行されました。

・岩永健吾（国際社会研究専攻5期生）さんが、Salsa World: A Global Dance in Local Contexts (Studies in Latin American and Caribbean Music) Sydney Hutchinson この中の日本のサルサダンスに関する章（Diffusion and Change in Salsa Dance Style in Japan.）を執筆しました。<http://www.amazon.co.jp/dp/1439910065>  
[http://www.temple.edu/tempress/titles/2267\\_reg.html](http://www.temple.edu/tempress/titles/2267_reg.html)

・橋本孝国際学部名誉教授が、『グリム童話全集』（全1巻）を西村書店より刊行しました。

### \* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第16号(2014年2月14日)

「外国につながる子どもフォーラム 2013」について

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 田巻松雄

第1部 「宇大生×Educare 生徒 日伯ユースサミット 2013～国際化する日本の光と影～」

国際学部3年 村里杏子

第2部 「特別の教育課程による日本語指導の開始に向けて」

～文部科学省初等中等教育局国際教育課課長補佐 河村裕美様からの説明（一部抜粋）～

第3部 「北関東における外国人児童生徒教育にどのように向き合うか」

国際学部特任准教授 若林秀樹

感想・意見等アンケートより（抜粋）

第3回「外国人児童・生徒グローバル教育推進協議会」報告

宇都宮大学 HANDS プロジェクト代表 田巻松雄

真岡市国際交流協会主催「イヤーエンドパーティー」に参加して

国際学部国際社会学科 堀部聖人

「特別の教育課程」の実施と、「外国人児童生徒支援会議」の可能性

国際学部特任准教授 若林秀樹

第5回 グローバル教育セミナー報告

大学院国際学研究科博士後期課程

国際学部附属多文化公共圏センター研究員 根本久美子

進め日本語教室第6回 パキスタン人姉妹から教えられたこと

壬生町立睦小学校 栃木康子

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記12

母語も日本語も自分の強みになるように！

国際学部国際文化学科 藤巻優美

サワディカ

真岡市立真岡小学校教諭 村上敬子

事務局便り

【HANDS プロジェクトからのお知らせ】

- ・『中学教科単語帳』（日本語⇄フィリピン語、別冊つき）刊行
  - ・「地域のグローバル化にどのように向き合うか」（田巻松雄著、下野新聞社）刊行
- 平成25年度宇都宮大学 HANDS プロジェクトの活動—

## ◎ 平成25年度 第2回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2014（平成26）年3月3日（月）午後4時から、宇都宮大学本部第1会議室（3階）にて、平成25年度第2回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・石田朋靖 理事・茅野甚治郎 理事・加藤幹彦 理事の大学側4名、今回から田巻松雄 国際学部長・教育学部長代理 酒井一博 評議員・池田 宰 工学研究科長3名と事務局担当者4名、志村なぎさ 国際学部同窓会理事・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・柴田 毅 教育学部同窓会会長・松本展壽 同副会長・小林哲夫 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・上澤和彦 工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・竹永 博 農学部峰ヶ丘同窓会副会長の同窓会側9名でした。議事内容は、協議事項として、1. 宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会申し合わせ（案）について、2. 宇都宮大学基金への協力依頼について（案）。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

## ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 10 月 4 日発行) 20 面に、「避難母子支援に 221 万円 宇都宮の市民団体」の内容で、[多文化公共圏センター](#)の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 10 月 28 日発行) 2 面に、「夢目指し、高校進学を ブラジル人教員が講演 宇大・多言語ガイダンス」の内容で [HANDS\(ハンズ\)プロジェクト](#)の記事が掲載されました。
3. 読売新聞 朝刊(平成 25 年 10 月 28 日発行) 33 面の「伝える⑨ 正造魂」に、「廃村跡地で学生に講義」の内容で[高際澄雄](#)先生の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 12 月 8 日発行) 4 面に、「外国人の子ども 教育の連携必要 宇大でフォーラム」の内容で、[HANDS\(ハンズ\)プロジェクト](#)と[若林秀樹](#)先生の記事が紹介されました。
6. 読売新聞 朝刊(平成 25 年 12 月 10 日発行) 33 面に、「「朝鮮人への偏見 正造は別 没後 100 年記念でシンポ」」の内容で、[多文化公共圏センター](#)、[丁貴連](#)先生と[高際澄雄](#)先生の記事が紹介されました。
7. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 12 月 16 日発行) 1 面に、「県北 2 市町保護者 園児被ばく不安 8 割超 宇大調査 7 割、支援法知らない」の内容で[清水奈名子](#)先生の記事が掲載されました。
8. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 12 月 19 日発行) 19 面に、「「石炭の街」の姿掘り起こす 「夕張は何を語るか」刊行 宇大の田巻教授編著」の内容で[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。

## ◎ 国際学部だより

1. 下野経済新聞 朝刊(平成 25 年 10 月 23 日発行) 11 面に、「仕事・家庭両立 こつなど伝授 宇都宮 初の女子学生セミナー」の内容で、国際学部 3 年生の[柳沢美里](#)さんの記事が掲載されました。
2. 朝日新聞 朝刊(平成 25 年 11 月 10 日発行) 29 面に、「「フェアトレード」まちチョコで広がれ 宇都宮市内 2 種類販売 宇大生企画、イベントで 100 個完売」の内容で [KAKEHASEEDs \(カケハシーズ\)](#)、メンバーの[会田翔子](#)さん(国際学部 4 年)と[庄司萌](#)さん(国際学部 4 年)の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 11 月 14 日発行) 25 面に、「バングラデシュの子どもたち 貧困 苦しむ現状知って 宇大生企画、17 日に上映会」の内容で[庄司萌](#)さん(国際学部 4 年)の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 朝刊(平成 25 年 12 月 2 日発行) 3 面に、「「食べる喜び」リレー 手料理囲みフードバンクへ寄付 宇大生が企画」の内容で[小野塚夕佳](#)さんと[宮澤将乃](#)さん(国際学部 4 年)の記事が掲載されました。

5. UU now33号(平成26年3月20日発行)4・5面の「特集浴びる英語」に、「EUPP Staitions」と題して、**松原奈々**さん(国際学部2年)の記事が紹介されました。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/33/uunow33.pdf>)

6. UU now33号(平成26年3月20日発行)8面の「Welcom to 研究室 & ゼミ」に、「国際学部 途上国発展経済論 阪本ゼミ」と題して、**阪本先生**の記事が紹介されました。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/33/uunow33.pdf>)

**研究室訪問 41** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第41回には国際社会交流研究講座所属の**友松篤信**先生にお願いしました。

### 「退職に際して一理系と文系の狭間で」

友松 篤信

#### 1. 理系から文系へ

私は、大学院では、生物化学を専攻しました。現在の言葉で言えば、バイオサイエンスです。その頃は、オーバードクターという和製英語が登場した時期で、博士が過剰生産された時代でした。就職先は自分で探そうと考えていた折り、ある教授から、JICAという組織がインドネシアの大学に派遣する専門家を募集していると聞き、応募しました。

私は、国際協力専門家として、JICAに11年間勤め、結局、食品製造から始まり、米の収穫後処理に関わる無償資金協力、農業研究、職業訓練など、農業開発や社会開発まで、幅広く経験しました。そうした中で、「始めに専門ありき」ではなく、「始めに(解決すべき)問題ありき」という、専門性を超えて行く学際性指向が強まりました。また、専門の違いを克服して知を形成して行く、ファシリテーションに関心を持つようになりました。

1991年に宇都宮大学農学部で助教授として赴任しましたが、ここではアフリカイネの研究を行い、1994年に国際学部で教授として赴任しました。ここで始めて、自然科学から社会科学に研究を転換しました。

私は、技術協力専門家として働いていた頃から、現場の社会現象に関心がありました。途上国では、技術的な問題解決では問題は解決せず、技術的課題の背景にある社会の制度・組織・集団・階層性の問題を考慮しないと、問題が解決しないからです。開発の現場にあるさまざまな社会現象は、知的興味を喚起します。研究機関の研究データはなぜ信用できないのか。政府機関では、業務上の決済になぜ1ヶ月以上もかかるのか。研究者は博士号をとると、なぜ研究を離れて行政職に就きたがるのか。オフィサーは、そばにワーカーがいると、なぜ間違いを認めないのか。オフィサーは、なぜ自分でも運べる目の前の物の運搬をわざわざワーカーを呼んでやらせるのか。日本からの援助物質を港湾で受け取るのに、なぜ賄賂を要求されるのか、等々。

国際協力の現場では、このような面白い社会現象が山盛りなのです。ところが、驚いたことに、現場でも日本でも、当時、現場で生起するこうした社会現象に関心を示す研究者

や専門家は、文化人類学の中根千恵教授を除き、ほとんどいなかったのです。私には、そのことが不思議でした。関連する学会に出ても、文系研究者の研究テーマは、大きな理論的な枠組みから個別事象を捉える演繹的アプローチが主流であり、政治経済学や国際関係論などで取り上げる研究テーマは、どこかイデオロギー的で、現場の臭いがしないのです。

研究にはさまざまな方法がありますが、私は、大きな理論的な枠組みから個別事象を捉える演繹的アプローチではなく、個々の援助現象を理論化する帰納的アプローチをとってきました。個別事象を理論化する方法は、自然科学の基本的な方法で、長年馴染んできたものです。

日本の援助関係者には、「日本の開発援助は、国際的にはあまり評価されていない」という思い込みがあり、これまで50年以上、誰もそれを疑いませんでした。私は院生の博士論文のテーマにこの問題を取り上げました。途上国新聞報道の定量的な内容分析を行った結果、米英独仏の援助と比較して、日本の開発援助は途上国で高い評価を受けていることが明らかになりました。これは、演繹的な枠組みから生まれ流布されてきた従来の言説を、データから結論を導く帰納的アプローチによって打破した成果でもあります。

## 2. 理系と文系の対立

世界には、文系と理系の隠れた対立があります。この問題を始めて指摘したのは、イギリスの物理学者で小説家 C. P. スノー (Charles Percy Snow : 1905-1980) です。『二つの文化と科学革命』(みすず書房) で、文系と理系はお互いに関心がなく、軽蔑し合っていると書いています。

イギリスの開発問題専門家ロバート・チェンバース (Robert Chambers:1932-) は、開発援助にはポリティカルエコノミストとフィジカルエコロジストの文化があり、両者には決定的な溝があると言います。分かりやすくするために、前者を文系、後者を理系と呼ぶことにしましょう。

理系は、途上国の貧困の原因を人口の増大、作物の収量、地球温暖化効果ガスなどの、目に見える「物理的要因」から説明する傾向があります。一方、文系は、途上国の貧困の原因を目に見えない社会構造や所有関係から説明する傾向があります。最大の問題は、両者がお互いに無関心であり、交流がないことです。

チェンバースによれば、理系は文系を、「現実の世界を知らず、批判は非建設的である」「術学的な内輪の議論に耽っている」「成功例ではなく失敗例について書く」「大学で若者たちを誤った方向に導く象牙の塔の住人」と見ており、文系は理系を、「視野が狭く凡庸で、せいぜいよくてナイーブな改革主義者」「技術系にいたっては、自ら気づかぬまま、体制の一部となっている」と見ていると言うのです。

私は JICA から大学に移った時、正にこの2つの文化の存在を実感し、その相克を経験しました。前述の理系の文系批判は、当時の私の実感でもあります。

開発分野の研究では、文系は **problem focus** すなわち問題の所在に関心があり、過去形

の質問「なぜそうなったのか」(why)を多用する傾向があります。一方、理系は **problem focus** すなわち問題の解決策に関心があり、未来形の質問「どうすればよいのか」(how)を多用します。理系は将来の問題解決に関心があるので、物事の捉え方は楽観的になります。文系は過去の問題の所在に関心があるので、物事の捉え方はどうしても悲観的になります。このように、文系と理系の間には、大きな壁があるのです。

開発援助研究で言えば、理系と文系二つの文化は、開発援助研究に流れる二つの地下水脈であり、ある時は伏流となり、時には地表水となって流れ出るように思います。

私は、理系と文系の間で、試行錯誤を繰り返しながら、退職の日を迎えました。

以上のような研究に対する感想をもって、私の退職の挨拶といたします。

宇都宮大学国際学研究科と同窓会の今後の一層のご発展を、心よりお祈り申し上げます。

(2014年3月14日原稿受理)

**研究室訪問 42** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第42回には地球文化形成研究講座所属の**高際澄雄**先生にお願いしました。

### 「国際学部での19年半」

高際 澄雄

19年半があつという間に過ぎました。思い出を書いてみたいと思います。

実は、国際学部を創設することには、賛成できませんでした。母校東京教育大学(現・筑波大学)がなくなり、最初の赴任地、新潟大学教育学部高田分校も新潟本校に統合され、上越市には上越教育大学が作られて、3度目の赴任地、宇都宮大学教養部も無くなることには、抵抗が大き過ぎました。それに恩師に相談したところ、国際学部と聞いて、考えこまれてしまいました。それで、創設計画には出来る限り関わらないようにしました。

ところが、私の願いも虚しく、宇都宮大学に国際学部ができそうになってきました。その上、中心となる授業科目を提案せよというので、**Intensive Training Course**を提案したところ、文部省(当時)に気に入られたようなのでした。ここで腹を括りました。もうこうなったからには、出来る限り積極的に関与するほかはない、と。

第1に目指したのは、出来る限り国際学部らしくすること、それには担当することになるイギリス文化論を英語で講義することとしました。イギリス文化論は、1年次生後期の授業ですから、学生受け入れの1995(平成7)年10月から始まります。そのための準備が大変でしたが、また大きなテレビを使って、ビデオで英語資料を使い、毎回、英語による課題を出しながら、後期を乗り切りました。

続いて提案した、インテンシブ・トレーニング・コースが2年次生の前期から始まりました。参加をお願いしたのは、佐々木一隆先生、外国人教師のシャーマン・リュー先生、そして非常勤講師のジェームズ・チェンバーズ先生で総勢教員4人、学生は60人。第1期

の学生で、非常に意欲的でした。オリエンテーションを行い、3週にわたる準備授業を経て、芳賀青年の家で、3泊4日の英語だけで生活する合宿を行い、帰ってきて試験をするという、基本パターンをこの年に作り上げました。さまざまな活動も盛り込みました。英語劇の作成、ゲーム、英語の歌、野外を歩くウォークラリー、じつに盛りだくさんでしたが、学生教員の熱意が功を奏して、目覚ましい効果を上げました。これは、その後も18年間発展しながら、継続されました。

次に私に、西村文夫学部長から、海外語学研修の制度を創設するように依頼されました。困り果てた私は、英語教育の権威鈴木博先生（2010(平成22)年10月に逝去）に相談に行ったところ、国際教育交換協議会日本代表部を紹介くださいました。そこで、相談したところ、オーストラリア・パースのカーティン工科大学で行うのがいいのではないかといいことでした。同時に、メルボルンのビクトリア工科大学（後にビクトリア大学に校名変更）との学術交流協定も、西村学部長から提案されました。そこで、2007(平成19)年7月に、学生を連れてパースまで行き、3週間の英語研修を一緒に体験すると同時に、3日間、メルボルンを訪れて、ビクトリア工科大学と学生交流の準備をしました。第1期の学生のビクトリア大学留学が実現したのは、1998(平成10)年になってからです。その年、私は科研費でビクトリア大学を訪れることができ、ビクトリア大学の寮 **Students Village** の豊かな環境の中で、3人の学生たちがのびのびと勉強する姿を見て、安心したのを鮮やかに覚えています。私はこのほかにも、カナダのノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学との学生交流にも関わりました。

そのうちに、始めて学生の卒論指導をすることになりました。ここでも、無理して、高次研究室では卒論は英語で書くことと決めました。4人の学生は、見事、英語で卒論を提出して、2人が進学、2人が就職しました。

1999(平成11)年は、始めて学年担任をしたことで忘れられません。学生たちをまとめるべく、旅行をしたり、コンパを頻繁に行ったりしました。おかげで、この学年の学生とは今でも親しく付き合っています。

同じく、1999(平成11)年に大学院修士課程が始まりました。私は、「イギリス文化変容過程研究」なる授業を開講し、昨年度まで担当しました。最初の院生のみなさんは、受講生がみな社会人で、きわめて活発で、課題を出すと、深く掘り下げてこられて、感心しました。翌年の学年では、イギリスの音楽文化を取り上げ、そこで私はヘンデルに出会い、彼の音楽と文学の関わりに強い興味を覚え、ついに今に至るまで、研究を続けています。

2004(平成16)年には、国立大学が法人化されました。私は職員組合活動を活発に行っていたので、法人化がどのような結果をもたらすかの情報を他の大学の組合からもらっており、反対運動を行いました。ほとんどの教員は無関心で、文部科学省の思惑どおり、法人化が実施されてしまいました。今、国立大学が苦勞しているとしたら、この法人化の結果であると間違いなく言うことができます。

大学の本来の役割は、学問の振興にあり、研究成果の実用化、金儲けにあるのではあり

ません。しかし、今、いかに金儲けをするかが、大学の活動の中心になってしまいました。情けないことですが、多くの教員、学生、院生、職員は、それが間違っていることに気づいています。宇都宮大学国際学部と大学院国際学研究科が、大学本来の学問の振興に向かって邁進されることを祈って、思い出を終わりたいと思います。

(2014年3月20日原稿受理)

**博士録 24** 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第24回目は執筆者がいませんので、掲載はお休みです。

**知究人 23** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は西村研究室OBの水谷宣洋さんと田巻研究室OGのサウウッド・ハラ・オサマさんをお願いしました。

「はじめまして(お久しぶりです)。」

水谷 宣洋

はじめまして(お久しぶりです)。国際学部第1期卒業の水谷です。私は国際社会学科を卒業後、筑波大学大学院の修士課程、地域研究研究科(現在は、人文社会科学研究科の国際地域研究専攻に名称変更)に進学し、終了後は物流会社に就職し現在に至っております。

今回は貴重な紙幅に、私の学生時代の研究について述べる機会を与えて頂き光栄です。大した研究キャリアではありませんでしたが、特に進路に迷っておられる学生の皆さんのご参考になれば幸いです。

### 大学院進学の動機

私が中学、高校を過ごした時期に、ベルリンの壁が崩れ、ソ連も崩壊するなど世界は大きな変革を迎え、さらに中東では湾岸戦争、旧ユーゴでは民族間の戦争が起きていました。国際学部に入學した理由は、そうした自分の想像の及ばない世界のダイナミズムに興味を持っていたからでした。

入学後は、第2外国語としてアジア系言語としてロシア語の講座を履修したことがきっかけで、ロシアやその周辺の国々の政治的情勢に関心が高まり、この地域にスポットを当てて知識を深めていこうと考えるようになりました。

一方で、国際学部での学究生活には物足りなさを感じ、環境を変えて研究を深めたいという欲求に駆られました。たとえば、当時の宇都宮大学(以下宇大)の図書館は蔵書数が少ない上に全ての蔵書が開架式ではないなど、使い勝手の悪いものでした。国際政治学に関する文献についても、蔵書が極めて少なく、国内外の主要な学会誌すら置かれていませんでした。このまま狭い世界で得られた知識をもとに社会に出て行くのではなく、成長のためにはもっと学問的な刺激を受ける必要があるのではと考へ、大学院へ進学する意志を固め

ました。

### 大学院での研究生活

進学先に選んだ筑波大学には国際政治学専攻の博士課程もあったのですが、将来は企業に就職しようとの考えもあったため、あえて修士課程の地域研究研究科に入学しました。

この研究科には、北米・カナダ、ラテンアメリカ、東アジア、東南アジア、中近東、ヨーロッパ、日本の 7 つのコースが設置されていて、それぞれのコースで学問分野を問わず自分の興味に従って研究を進めることができるという特徴がありました。また学生も、筑波大学出身者が全体の半分程度で、残りの半分は他大学から試験を受けて入学した学生や留学生という構成で、ハイブリッドな雰囲気の中で学問ができる環境でした。

また、特定のゼミ(あるいは研究室)に所属する必要もないために学問的自由度が高い一方で、学生には自立と責任が求められていました。修士課程の 2 年間というのはあっという間でしたが、そこでは学問分野を超えて多くの友人と議論ぶつけることができましたし、国際政治学の博士課程のゼミに参加をして、修士論文執筆に際しては大きな刺激を受けることができました。自分のスタイルに合った研究活動ができたことは、2 年間の大きな収穫でした。

修士論文は、1995(平成 7)年から 1998(平成 10)年頃のロシアによるカフカース諸国への軍事侵攻に焦点を当て、ロシアの軍事的意図を軍の機関紙を中心に読み解いていくという手法で取り組みました。一方で、私の研究内容について専門的な教を請うことができる先生あるいは研究者が学内にいなかったため、研究内容を深掘していくという点については不十分であったと反省しています。

### 最後に

修士論文の仕上がりには多少の悔いが残りましたが、その過程でさまざまな研究分野の仲間と出会い視野が広がったこと、また自分で設定した研究テーマについていろいろな角度から検証して論文を組み立てていく、という作業は今の私の人格形成に大きな影響を及ぼしたと考えています。ロシアの研究はもちろん、この国とのかかわりについても、今のところ現在の会社での業務ではつながりはありませんが、修士論文を書き上げるまでに経験したあらゆることが今の仕事への取り組み方にも生きていると考えています。

私が 1 期生として卒業した後も、それに続く多くの卒業生の方が国内外の他大学院に進学して活躍されていると聞き及んでおります。今後も多くの若い皆さんが宇大を飛び出して新しい学問環境にチャレンジされ、皆さんなりの大きな成果をあげることを期待してやみません。

(国際学部 国際社会学科 第 1 期卒業生)

(2014 年 3 月 23 日原稿受理)

## 「ドクターになるということ」

大阪大学大学院・国際公共政策研究科・博士後期課程1年生

サウード・ハラ・オサマ

私は宇都宮大学国際学部卒業後、大阪大学において修士号を取得し、その後博士後期課程に進学しました。私はパレスチナの難民に関わる研究をしています。

博士課程は勉強好きな人や自分の研究テーマにやりがいを持っていてどうしても続けた人のためにあると一般的に考えられていますが、実際はそれだけではなく、独創的なアイデアなどの才能が求められます。今回は、博士課程を薦めるために、まず博士課程の「デメリット」をいくつか述べます。

### 勉強は大変、いい仕事は見つからないも

博士課程は授業が学部や修士課程に比べて少ないが授業の内容は難しく、求められるレベルも学部や修士頃より当然高くなります。また、後輩の学生を指導等し、授業のティーチングアシスタントなども求められます。そういった中には実際に3年間で博士号を取るという事は相当な才能がある人で、5年またそれ以上かかる人がほとんどです。それ以外にもいくら努力をしても自分の能力が周囲の学者や先生に認められない可能性も十分にあります。

博士課程に進学する上で、さらに問題になって来るのは金銭的な面でしょう。奨学金を貰わない限り、何年もアルバイトと研究を両立しなければなりません。学問的に満足されたとしても、お腹の減りは満足できない生き方になる覚悟をして博士課程進学を選択すべきでしょう。

その後の博士のキャリアは長い目で見るものであり、上手く行くと一般的には大学教員などの良い職に就けるイメージがありますが、実際は博士号保持者が大学や研究機関のポスト数をはるかに上回るがため、就けるのは非常勤講師のポストがほとんどです。自分が思い描く仕事に就くには長年かかり、あるいは、その日が来ないという悲惨な結果もあります。

以上が進学するに当たっての「デメリット」です。では、博士課程においてどのような「メリット」があるかを、私の経験にもとづいて述べます。

### 「生き方」

博士課程の道を歩む人は、前述した「デメリット」考慮した上で、自分の好きな分野を好きなだけ研究出来ることに、有難さと自由を感じることが出来ます。常に脳を回転させ無聊に苦しまないのです。研究者コミュニティーでネットワークを構築し、あらゆる問題の解決策を探るためのブレインストーミングをします。博士号取得はキャリアというのではなく、「生き方」を学ぶことかもしれません。それに幸せを得られる者はぜひ博士課程に進んでほしいと思います。

(国際学部 国際社会学科 第12期卒業生)

(2014年3月5日原稿受理)

**海外だより 17** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外在住者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**海外留学今昔 09** 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

### 「香港大学での留学半年を終えて」

〇〇〇〇

初めまして。平成25年9月から香港大学へ留学させていただいております国際学部2年の〇〇〇〇と申します。交換留学をさせていただいている感謝の気持ちと、交換留学を考えている方々へ少しでも参考になればという思いから、私の留学生生活を報告させていただきます。

香港大学は、世界的な大学ランキング(The Times Higher Education World University Ranking 2013-2014)において東京大学、シンガポール国立大学に次ぐアジア第3位に選ばれる名門校です。ちなみに、辛亥革命を成功に導いた、みなさんご存知の孫文も香港大学の出身です。また、交換留学生の数だけでも1000人を超えるととても国際色豊かな大学です。授業は基本的にすべて英語で行われます。

私は Faculty of Social Sciences に所属していたので主に自分の学部の中から興味がある科目を受講しました。ここでは受講した授業の1つを紹介します。“Hong Kong Popular Culture”という授業では、その名の通り香港のポピュラーカルチャーについて勉強しました。この授業の中で、自分が担当したプレゼンテーションが香港の文化における中国本土の影響と香港人のアイデンティティーついてでした。実際に香港人の友人にアンケートをとったりしていく中で、彼らが中国本土に対してどんな感情を抱いているのか、また彼らが香港人としてのアイデンティティーを強くもっていることを知ることができました。ここまで、授業の内容を書いてきましたが、私が本当に伝えたいことは別にあります。それは、香港大学で学ぶ学生たちの勉強に対する姿勢です。Tutorial という、講義で学んだことを深めるための Discussion 形式のクラスでは、それぞれの学生が自分の意見を持って積極的に発言をし、膨大な量の Reading の課題を夜遅くまでこなし、テスト期間には皆が必死に勉強する。こんなに競争的な環境に自分をおける留学先は香港大学以外にないのではないかと思います。

では、私が香港大学で勉強ばかりの毎日を送っているか。答えはノーです。たくさん勉

強して、その他のアクティビティーも思いっきり充実させています。現在は大学と寮のソフトボールのチームに所属しています。大学のチームは香港の代表チームに選ばれている選手もいるチームで、寮のチームは初心者がほとんどといったチームです。大学のチームでは自分以外は全員香港人ですが、積極的に取り組んでいった結果レギュラーとして試合に出ることができています。寮のチームでは選手としてもプレーしていますが、自分が高校野球までやってきた経験を生かしチームメイトに指導をしています。教えていく中で英語が出てこないこともあります。自分にとっても英語で伝える訓練になると思うので続けていきたいです。ソフトボールの他にも、深夜に寮の仲間と飲茶に行ったり、寮の仲間、そしてチームメイトに誕生日を祝ってもらったり、中国のお正月に友達の家を招いてもらったり、本当に毎日が充実しています。また、香港大学に同じく留学している日本人との出会いも私にとって大きなものでした。留学したらできるだけ日本人と絡まないほうがよいという意見もありますが(初めは私もそうでした...。)、志の高い優秀で、ちょっと変わった？他大学の学生との出会いは間違いなく刺激になりました。きっと、香港大学に留学せず、宇都宮にいたままであったら出会えなかった方々であると思います。

最後になりますが、英語での **Lecture**、**Tutorial** や大量の課題で英語の能力は向上が期待でき、さまざまな文化が入り混じった香港の独特な雰囲気が味わえ、香港大学の学生の強烈な競争意識を感じることができ、意識の高い日本人留学生とも出会うことができる香港大学への交換留学。英語圏などに比べ、留学の費用自体も比較的安いと思います。多くの方が英語を伸ばしたいという理由でアメリカ、イギリスやオーストラリアなどの英語圏を留学先として考えることが多いように思われます(私の場合はそうでした)。この記事が、留学を考えている少しでも多くの方が留学に対しての視野を広げて考えるきっかけになることを願ってやみません。

(国際学部 国際文化学科 2年在学生)

(2014年2月2日原稿受理) 2015年9月16日に本人の申し出により匿名に、また画像は削除しました。

\*画像は国際学部同窓会 HP コミュニティ広場で見られます。 <http://afis.jp>

学生サロン07 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。

### 「友松篤信教授退官パーティー」

友松研究室 2013年度卒業生一同

文責 逸見 栞

去る2014(平成26)年3月1日、東京・飯田橋にある日本出版クラブ会館にて、友松篤信教授の退官パーティーが開催されました。友松研究室の同窓生及び友松教授の恩師である岸本修元農学部教授、JICA元職員である桂井宏一郎氏など、約40名が出席し、友松教授を囲みました。ここでは同窓生のスピーチを中心に、退官パーティーの様子をご報告したいと思います。

2003(平成 15)年に修士課程修了の中川絢子さんは、現在、東京・千代田区にある NGO で働いています。NGO で働く今、友松研究室での学びが仕事に生かされているのを実感しているそうです。中川さんが心に残っている言葉の一つに、「国際協力の道は獣道。道なき道を自分で開拓していく」という言葉があります。これは、友松教授の恩師である岸本修教授の言葉で、代々受け継がれてきました。中川さんは、学生時代にはこの言葉の意味を理解出来ませんでした。社会に出て NGO で働く今、同じ NGO で働いていても様々な働き方があり、国際協力の方法があることを肌で感じ、この言葉の意味を実感しているそうです。

2004(平成 16)年度卒の岩井俊宗さんは、大学卒業後 NPO やボランティア支援センターの職員を経て、現在は NPO 法人を設立しています。友松研究室での思い出は、アジア学院での実習での研修生へのインタビューです。岩井さんは、当時インタビュー原稿を何度も直されました。「これでは事実が聞き出せない」「”ファクト”は何だ」という友松教授の指導で、本質を探るための問いを本気でつくり実践することを学びました。地域の課題やそこで生きている人々の想いを聞く際に、“本質はどこにあるのか”と意識をし、仕事に活かしています。

最後に、岸本先生からは宇都宮大学の歴史をお話していただきました。宇都宮大学では国際学部の歴史は浅いですが、農学での国際性は古くから在り、世界に広まっていた歴史があるそうです。その流れがあって現在の国際学部があり、岸本先生が蒔いた国際協力の種を友松教授が開かせてきたのだ、と岸本先生は我々に説いて下さいました。

友松教授は、退官された後に新たにビジネスを始められます。「誰もやっていないことにチャレンジすることが面白くて大事なことだ」と常日頃仰っている友松教授ですが、まさにその言葉を退官後の人生で体現なさっていきます。そのことが、私たち同窓生に刺激と勇気を与えてくださいました。ぜひ協力したいと名乗り出る同窓生が何人も居りました。それも、友松教授の人柄のなせるものではないかと思えます。

友松教授の益々のご活躍をお祈りいたします。友松先生、多くの学びをありがとうございました。

(国際学部 国際社会学科 2013 年度卒業生)

(2014 年 3 月 20 日原稿受理)

**キャリア指南 12** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。現在、執筆者を募集中です。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい国際学部卒業生の情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**フォーラム** 2014 年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は執筆者がいませんので、掲載はお休みです。

## 「同窓会東京懇親会開催」

国際学部同窓会理事 志村なぎさ

平成 26 年 2 月 1 日（土）に、池袋にて国際学部同窓会東京懇親会を開催しました。当日は、大学から田巻松雄先生、佐々木一隆先生、中村真先生が来てくださり、また退官なさった北島滋名誉教授も参加され、国際学部および国際学研究科同窓生と合わせて 12 名での楽しい会となりました。

東京での懇親会は今回で 2 回目になります。前回開催が平成 23 年でしたので、丸 3 年の空白となってしまいました。「毎年開催します！」と意気込んでいたのに、2 回目が 3 年後になるとは・・・、面目次第もございません。

参加者の募集に当たっては、昨年開設した Facebook ページでの告知や前回参加者へのメール連絡などを主体とし、全同窓生への案内文配布などは行いませんでした。このため、ご存じなかった同窓生の皆さんも多くおられることと思います。先生方が多数参加して下さったことを考えれば、全同窓生への文書配布なども検討すべきだったかなと考えております。また、同窓会ではメーリングリストの作成なども検討しておりますので、情報配信ツールについては今後の課題となるでしょうか。

当日の出席者は、学部同窓生が全員 1 期生となってしまいました。卒業以来会うことのなかった同窓生に会うことができ、いろいろなお話をうかがうことができました。名刺を交換し、皆さんの近況報告を聞きながら、あっという間に一次会、二次会と時間が過ぎていきました。

私事ではありますが、懇親会終了後、同窓生の花香信宏さんから私が勤務する専門学校の学生にアルバイトを紹介していただく機会がありました。

人の縁はいろいろな形につながっていきます。私ども国際学部同窓会は、今後もこうした懇親会やホームページ、Facebook などのソーシャルメディアを通し、同窓生の相互交流を図ってまいりたいと考えております。そして社会資本としての同窓会ネットワークを拡大してまいりたいと考えております。

別件ではありますが、今年は国際学部開設 20 周年記念の年に当たります。峰ヶ丘祭に合わせて第 3 回ホームカミングデイが 11 月 22 日（土）に行われるのですが、国際学部ではこの日に 20 周年記念イベントを開催する予定です。退官なさった先生方も多数ご参加くださるそうです。同窓会もできる限りお手伝いさせていただき所存です。同窓生の皆さんの多数の参加をお待ちしております。

（国際学部 国際社会学科 第 1 期卒業生）

（2014 年 3 月 17 日原稿受理）

### お知らせ

宇都宮大学本部より、第 3 回ホームカミングデー開催の日時案が決定されました。本年の平成 26 年大学祭開催期間中(平成 26 年 11 月 22 日(土)に開催決定)です。なお、行事

の詳細は後日改めてお知らせします。

### 国際学部学位授与式から

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する国際学部長賞と国際学部同窓会長賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

国際学部

・総代 1名

①宮武佳代「現代日本の幸福観—モノと心の二項対立に注目して—」友松研究室

・国際学部長賞 4名

①赤塚諭「日本の空港経営—新しい空港経営方針と空港のネットワークの再編—」磯谷研究室

②田中えり「語られるフクシマを超えて」古村研究室

③ブラボ コハツ・ホセ ラウル「在日ペルー人の 20 年—若者の語りから—」田巻研究室

④石川旺(ひかり)

「民国初期、化粧する「新婦女」—『婦女雑誌』の記事・広告分析より」松金研究室

・国際学部同窓会賞 5名

①秋元明日香「人権問題としての HIV/AIDS についての考察—日本とウガンダの比較を中心として—」清水奈名子研究室

②川島正恵「FGM/女子割礼を取り巻く人間関係の考察—タンザニアとケニアの父系的農牧民を手がかりとして—」阪本研究室

③阿久津美也「女性印象派画家による母子像の変容」大野研究室

④阿部里美「The history of Vikings and its Cultural Influence in the Danelaw –anglo Scadinavian Hybrid culture in English History—」高際研究室

⑤安富智希「夏目漱石『こころ』論—「国のため」に書かれた『こころ』—」田口研究室

### 国際学研究科学位授与式から

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において修士論文を表彰する国際学研究科長賞と国際学部同窓会長賞（呼称に異議あり）が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・学生賞 1名

①陳 佳敏「植民地体験から読み取る中島敦の文学世界」丁研究室

・国際学研究科長賞 2名

①石崎達也「A Study of a Teaching Method of English Pronunciation to Japanese Learners Based on Acoustic Phonetics」湯澤研究室

②劉 洋「中国における喫茶の変容に関する研究—文学作品に描かれた明清の茶館・文人・庶民—」松金研究室

・国際学部同窓会長賞（呼称に異議あり）

- ①辻 紀江「栃木県における在日外国人への医療、福祉支援の現状と課題～多文化ソーシャルワークの視点から～」田巻研究室
- ②加藤 清「地方都市の小規模市民団体の現状と課題～地域に密着した小規模市民団体の役割と資源～」重田研究室

**EU 支部だより**

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の第 9 号の内容は、1 世界で最も家事に協力的な男性は・・・ 2 EU 支部だより 一日・EU 協力のための行動計画ー についてです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

**編集者のひとりごと**

●今回の国際学研究科授与式において、不可解なできごとがありました。事前に大学院同窓会には国際学部同窓会長賞の授与があることに相談がありませんでした。本来ならば、国際学研究科同窓会賞とするべきものと考えています。ただ、当会は財源をもたない団体ということで、国際学部同窓会と相談の上、強行されたものと思われます。大変遺憾に思います。学生諸氏においては大変貴重なことですが、2 年前の国際学部から他学部に迎合した国際学部同窓会と国際学研究科同窓会の合併が求められました。学部同窓会とは話し合いでゆるやかな連携をする立場で協力関係を保ってきました。今回の出来事はその関係を壊すはなはだ失礼な出来事でした。大変残念です。

次年度以降は議論を重ねて、有意義な組織運営で行なっていただきたいです。今回は学部同窓会からのプレゼントとして、ありがたくその行為を受け止めたいと思います。

●年度の末の学位記授与式の出席（記録写真撮影と名簿記入依頼）と知求会ニュース編集作業で、メーリングリストの移管作業が 4 月に連れ込みました。このニュースはヤフーグループまたは個人のアドレスから送付しますので、多少のご不便をお掛けしますが、ご了承ください。なお、連絡先はヤフーグループからフリーメールへ変更してあります。

---

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**[chikyukai@freeml.com](mailto:chikyukai@freeml.com)